

学校教育相談の

3つのC

福岡教育大学大学院教授

西山 久子

にしやま ひさこ 子どもたちの学校生活が充実するための体制づくりや、教育相談担当者の専門性確立に向けた実践・研究を行っています。公認心理師、学校心理士、臨床心理士、米国カリフォルニア州公認S.C.



に特化して、中核的役割を果たさなければならぬという大切な位置に立つことになるのです(次ページの図1)。

そうした、やり甲斐はあるだろうけれど、少し大変そうな、教育相談コーディネーター(教育相談担当者なども含みます)を担われる方々に、少しでもお役に立つような連載になることを目指します。

さて、教育相談コーディネーターとして活動するにあたり、次のようなことが気になっておられるのではないかと思います。

- ・担当者として何をすればよいか
- ・担当者として誰とつながればよいか
- ・担当者としてどんな支援のチームづくりをすればよいか

そこで、この連載では、個人ですぐにできそうなこと、できるようになっておけばよいこと、そして個人を超えた支援を考える必要があることなどについて検討します。第一回では、教育相談コーディネーターの仕事の概要をとらえ、その中でも頻度の高い、カウンセリングによる直接的な支援を中心に考えます。

新学期、教育相談コーディネーターやそれと同等の役割を担われることになった方、責任を感じたり、楽しみに感じたり、また困惑したりと、さまざまな思いをおもちなのではないでしょうか。

教育相談コーディネーターは、とても大きな広がりのある役割です。二〇一〇年版「生徒指導提要」でも教育相談の重要性は指摘されていましたが、二〇二二

年版「生徒指導提要」では、より詳細に重要性が示されています。

しかし、この役割に対しては、養護教諭などのような教員免許状など公的に明らかな手がありませぬ。にもかかわらず、学校現場の状況から、自分の担う役割を見極め、学級担任など児童生徒を預かる先生方と学校管理職やその他の校務運営の推進者の中で、「児童生徒支援」

教育相談コーディネーターの 専門的な力量とは

教育相談コーディネーターとして、例えば不登校傾向の児童生徒やその保護者・学級担任に対して、好ましい支援ができるようになるためには、どのような力量を身につけるとよいのでしょうか。

学校教育相談での子どもや保護者、他の教員たち等との関係性には、「スクールカウンセリングにおける3つのC」と言われるものがあります。一対一で行う直接的支援である「カウンセリング」、子どもへの教育・援助をする方への異なる立場・専門性からの間接的支援である「コンサルテーション」、そして職種を束ねる支援である「コーディネーション」です。これら「スクールカウンセリングにおける3つのC」は、それぞれに特徴的な支援の方があります。これら3つのCについて、少しずつ研鑽を積んでいくところから始められるとよいと思います。今回はその中でも、「カウンセリング」を中心にお伝えします。

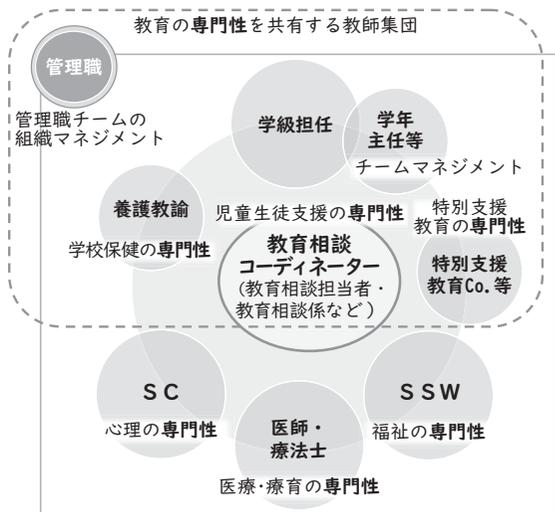
1つ目のC カウンセリング

カウンセリングは、教育相談コーディネーターに欠くことができない大切なスキルです。困難や悩みを抱える子ども・保護者や同僚に寄り添うための最低限の態度は、カウンセリングの基礎的なスキルによって裏づけられます。その一方で、カウンセリングは幅広く、成長促進的な役割も果たせば、緊急支援のような危機的場面においても必要な奥深さもあります。教育相談コーディネーターを務める上で、カウンセリングの力量は、多くの場面で役立ちます。少し例を挙げて考えてみましょう。

一対一で行う集中的な相談

まず、相手の話をしっかり聴くことです。相手が話をする段階に至るまでにはいぶん時間がかかる場合も多いでしょう。沈黙が続いたり、はぐらかされたりするかもしれません。そんなときも無理に聞

図1 児童生徒支援の中核となる教育相談コーディネーター



き出すのではなく、話し手が話せる範囲までをしっかりと聴き、相手の伝えようとしていることにしっかりと寄り添います。好ましい答えだけを評価的に受け入れたり、聞き手の解釈をあてはめたりしないように気をつけます。話し手が心の中にある迷いや気になることを、聞き手の助けを借りて言葉にする中で取り出して考えられるというイメージです。

そして、聞き手が期待する「話の決着」にこだわらず、話し手本人が「納得

すると「ところで区切り、話したことは、そう悪い経験ではなかった」と感じてもらえたら、きつと次につながります。

子どもが安心できる声かけ

相談室や保健室、校内の廊下などで子どもと出会った際に、様子を見ながら、声かけをします。こちらがリードするより、「最近どう?」「今日の調子は?」など、相手がどのようにでも応えられるような問いを穏やかに投げかけて、何が返ってくるか待ちます。子どもが安心できる声かけをすることが大切です。

毎日かかわっている子どもとの間であれば、定点チェックとしての健康観察のような役割で話すことになるでしょう。また、久しぶりの出会いであれば、「どうしてた?」などと気にかけていたことをさりげなく伝えることもできるでしょう。なかには答えに窮し、沈黙してしまう子どももあるかもしれません。そのときは、うなずきだけで答えられる、簡単な問いかけにします。会えたうれしさを穏やかに伝え、少し時間をおいてもよいでしょう。

授業や学習支援場面での共感的応答

別室登校をしている子どもや、通常学級でも脆弱性の高い子どものかかわり方には、子どもの目線から状況をとらえた、細やかな配慮と共感的応答が必要です。

「そこがわからないの?」と先生が率直に聴いたことで、周りを気にしてしまう子もいます。机間指導で話しかける先生の声が大きすぎると感じ、先生の話の内容に集中できなくなる子もいます。

ペアレントトレーニングや療育でよく言われることに、「CCQ」という合言葉があります。「穏やかに・近づいて・静かに(Calm-Close-Quiet)」かかるといってもですが、不登校や困難を抱えた子どもにも必要に応じて活用したいアプローチです。不安が高い段階の子どもには、声のトーンやスピードも合わせましょう。

先を見通した成長促進的な支援

さらに、子どもとのカウンセリングでは、ぜひ、成長促進的な視点でのかかわりも含めていきたいものです。

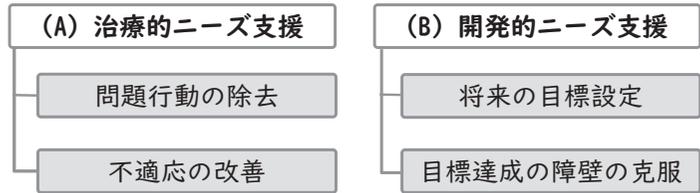
例えば進路支援においては、その時点のことだけでなく、先のことを考えなければならぬのは明らかです。そして、進路以外の場面でも、同じように成長促進的な支援が有効です。その時点で困ったことに出合っているとすれば、それをどう克服するかは、その子どもにとっての、将来に役立つ学びとなるはずです。

よくない言動があったとしても、子どもが一定の指導を受けたのちは、次にこのような状況に陥らないためにどうすればよいかを一緒に考えます。子どもに「もしまた同じ場面があったら、今度はどうしますか?」と尋ねると、適切な振る舞いがしっかり構想されているかどうかを推し量ることができ、支援の手がかりになります。

日常の出来事はすべて、子どもが成長するための題材になります。本人が受け止められる範囲で、そうした題材を活用することもできます。

図2にあるように、カウンセリングは必ずしも問題があったときだけに行われるわけではありません。子どもが今と未

図2 カウンセリングのニーズ別支援の展開



来に一歩ずつ着実に進んでいけるよう、問題状況を乗り越えることや不適応を改善することを脇から支えるために行われます。さらに、子どもがよりよく成長し、将来の目標を設定し、それに向かって進みつつ、その途上で出合う障壁を克服することを支えるためにも行われるのです。

教育相談コーディネーターの カウンセリング

教育相談コーディネーターが児童生徒のカウンセリングをする際、しっかりと相手の話を受け止めながら、同時に検討していきたいことがあります。それは、「相手を支援するために、どの領域の専門

的な力量が求められるか」、そして「それは自分が持ち合わせている力量か?」ということなのです。それを的確にとらえることで、非常勤のスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門職につなぐ方針が立てられます。自分一人ですの子に關するすべての支援を抱えようとするのは、かえって子どもの成長のブレーキとなりかねません。

言い換えると、教育相談コーディネーターのカウンセリングでは、常に自分の専門的力量を俯瞰し、同時に、多職種からなる仲間の専門的力量を理解しておき、それらを調整することも求められます。そこで重要なのが、残りの二つのCです。

二つ目と三つ目のC 「コンサルテーション」と 「コーディネーション」

児童生徒の支援に直接かわる人を支援するコンサルテーションは、二人以上の人々で、①目的を明確化し、②ゴール設定をし、③そのゴールを達成するのに必要な策を定め、④それらの策を分担し

て実行していくことです。教育相談コーディネーターは、コンサルテーションをする側にも、受ける側にもなります。

児童生徒の支援の輪づくりをするコーディネーションは、多職種による支援をより大きな規模で行う際に多く用いられます。また、学校を安心安全な場にするための、スクールワイドな活動にも用いることができます。

これら二つのCについては、改めて検討していきます。

*

新年度を迎え、「あれもこれも…」と焦る気持ちが湧いている方もおられるかもしれません。しかし、私たち自身が何かの取り組みを理解する際も、知識として理解したあと、実際の支援などの動きに反映できるまでには、咀嚼する(試行錯誤する)時間が必要ではないでしょうか。同様に、今できることを頼りにして、拡げていきたい領域に強みをもつ仲間とつながって、共に成果を生み出し、小さくても喜び合う機会が増える一年となるよう、進んでいきましょう。